

歴史の舞台

文明の
さまごさま

司馬遼太郎



歴史の舞台

文明の
さきま

司馬遼太郎

中央公論社

歴史の舞台

文明のさまじま

©一九八四

定価九八〇円

昭和五十九年三月十日印刷
昭和五十九年三月二十日発行

著者 司馬遼太郎

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替東京二一三四

候印廃止

ISBN 4-12-001280-8

歴史の舞台

文明のさまざま

目次

口絵 天山の大空間に生きる人々

天山の麓の緑のなかで

イリ十日記 天山路の諸民族たち

文明論への重要な資料

鮮やかな光度をもつ北方文化

沸騰する社会と諸思想

複合された古代世界の舞台

漢字と孔子

『叛旗』と李自成のこと

182 169 154 132 129 125 71 7

古朝鮮の成立

189

アラブと銃前

204

友人の旅の話

213

倭寇と老熟

230

倭の印象

239

高野山管見

248

あとがきに代えて

263

歴史の舞台

文明のさまざま

天山の麓の緑のなかで

草原

この文章を読んでくださる人は、草原という世界に、激しくかつこまやかな想像力をかきたてていただかねばならない。

それは、ユーラシア大陸の東西をむすぶ幅のひろい——そして長く、ときに放恣^{ほうし}に沙漠によってと切れ、さらにつながってのびてゆく——乾燥地帯の緑の帯である。

この稿を書くについて私は念のため机の上に地球儀を用意した。

私のいう緑の帯は、むろん北極にちかい岩と森林の地帯や、凍土や湿地の多いシベリアまでは、北にのぼらない。しかしギリシアやインド、中国の長城内部のようには南にくだらないのである。

その中間を東西につらぬき、断続してのびている。

ここでいう草原とは、アフリカやオーストラリア、あるいはアメリカ大陸に点在するそれをふくまず、ユーラシア大陸において、しばしば歴史を決定したそのみを指すことにする。

この草原に発生した文明をおもうとき、こんにちの狭隘な国境概念で拘束されれば、風船がしばむように想像が萎^なえてしまう。このことは地球規模でもおわざるをえない。たとえば天山の草原というのは、ユーラシア大陸の北に水をたたえている北極海から遠く、さらには、南の地中海、アラビア海、インド洋、太平洋などからも遠い。そのような南北のいずれの海から湧きあがる水蒸気のおこぼれを、この緑の帯はわずかしか享受してないのである。

まったく享^うけることがなければ、沙漠になってしまう。

なにかの自然条件——たとえば天山山脈のような長大な壁——によって遠い海からの水蒸気をわずかに受けると、高嶺に雪が積もり、それがわずかずつ溶けて山麓や谷をうるおし、やがては固い地表の平坦地にまで草を生ぜしめる。といって、水分がわずかであるために森林を生ずるまでには至らない。

乾燥地帯ということでは、草原は沙漠と兄弟でもある。つねに沙漠と抱きあわせられるようにして存在し、歴史の長い周期のなかで、かつて草原であったところが沙漠になってしまったりする。草原に住む諸民族が、沙漠化する自然に追われて大移動することによって、歴史の動きを刺

激し、ときに左右したことがしばしばあった。

「遊牧」

というのは、よく誤解されるように、古代的な未開の形態と考えるべきではない。すでに地球のあらゆる場所で農業が営まれていた歴史時代に、突如あらわれ出た新形式の暮らし方なのである。

それまで草原に人類は住んでいなかったであろう。

むしろ沙漠の縁辺のほうに、人は住んでいた。沙漠の縁辺のオアシスに住みついて水を得、農業を営んだ。中国新疆ウイグル自治区しんきょうという日本列島の四倍もある広大な地を、ふつうわれわれはシルクロードとよぶ。その例でいえば、中央にあらゆる生物を拒絶するタクラマカン大沙漠がある。その南の縁辺は崑崙山脈こんろんなどの雪どけ水が伏流水になったりして、ところどころにオアシスを現出している。シルクロードの南道などは、一見、沙の色の地でありながら、オアシスが数珠玉ずのようにならび、そこで農業を営んできたひとたちが、古代オアシス国家のきらびやかな文化を遺した。

ひるがえっていえば、オアシスという沙漠の縁辺のほうが、人類にとって衛生的だったかともえる。

私はかつて暑い時期、南道のホータンへ行つたとき、夜、電灯のまわりに飛ぶ羽虫をいっぴきも見かけないことにおどろいた。このとき、

「どういう駆除法をやっているのか」

と同行の藤堂明保教授が流暢な中国語で土地の指導者にきいたが、相手は害虫そのものの存在概念を理解せず、しきりにくびをひねっていた。ホータンから数キロも離れれば大沙漠なのである。虫さえ育ちにくいこの環境では、人間や家畜の生命に害をあたえる微生物の種類や数も、温暖多湿の農業適地にくらべれば極端にすくないだろうと思われた。エジプトやメソポタミアといった古代文明が沙漠の縁辺で興つたという理由の一つが、理解できたような気がしなくてもなかつた。

草原は、そういうものではない。

蝶も蛾もいるし、タルバガンのようなリスに似た小動物も、この地に穴を掘つてときどき跳び出してくるし、うさぎやきつねもいる。山羊や羊も野生でくらしていたし、かれらの敵である狼も棲んでいる。馬も、野生時代は主として草原が棲家であつた。

ただし、はるかな古代、草原は人間だけは棲息しがたかつた。

採集すべき木ノ実もないし、けものに近づこうにも、一望の平坦地であるために相手が遁^にげて

しまう。採集時代の人間はやはり森のある土地がその棲息の適地で、農耕時代になると、人間たちは森から出て低地に棲み、河の氾濫が繰りかえされる湿潤の地やオアシスで穀物などを栽培した。むろん、この段階においても草原は見すてられた地だった。

「草原で住む」

という暮らしのシステムを考えついた偉大な民族は、スキタイであった。この古代民族は、紀元前三世紀に亡んで、いまは存在しない。ヘロドトス（紀元前五世紀）の『歴史』のなかに出てくる多少の記述と、かれらが遺したスキタイ風の金属加工品などの文物を通してしか知ることができないが、かれらについて考えるとき、私はつねに昂奮なしにかれらの文化、気質、相貌などを想像することができない。

地球儀を西にまわして黒海を見ることにする。

スキタイは、紀元前六世紀からわずか三百年ほどのあいだ、この黒海北方の内陸の草原で栄えた。

かれらはイラン系の民族で、どこからきたかは諸説がある。紀元前六世紀にこの草原に出現し、まず馬に騎するという他の人類にとっては奇抜すぎることを創始した。

と同時に、遊牧を考えだした。草原に群棲している羊の群れのなかに入りこみ、それらが草を食って移動してゆくままに人間も移動する（こういう角度で遊牧生活史を考えることは、一九四

○年代に内蒙古地方に滞留して遊牧生活を觀察研究した今西錦司氏によって最初になされた。さらには、他の肉食獣からかれらを守るといふ役割を人間が果たすことによつて人間のほうから羊の群れに寄生するといふしぎな方法の發明であつた。それまで人類は羊を人間の住居にひきよせ、手もとに置いて飼うことはしてきたが、人間が逆に羊の群れのなかに入りこんで移動するという暮らし方はなんとも奇抜なものであつた。

その「文明」を成立させるためには、機敏に人が駆けまわらねばならない。そのために騎馬が必要であつたし、さらには家屋を固定せず、簡便に移動しうる天幕テントも開發せざるをえなかつた。山羊を飼い、馬も飼つた。豚だけは飼わなかつた。豚は農民といふ定着者のための家畜で、遊牧者がこれを飼うと、輕快に移動できなくなるのである。ヘロドトスも、スキタイは豚を飼わなかつた、と書いてゐる。

遊牧文明の東漸

スキタイは、紀元前三世紀に亡ぶ。

騎馬民族の必需品である帶鉤オビフタ（バックル）とフェルト製の天幕と羊や馬などに依存した食物、飲みものなど、遊牧といふ文明（だれでもそのシステムを身につければ参加できるという意味で、

文化というより文明であらう)に必要な物や事を遺し、かれら自身は消え、土中の考古学的な存在になってしまふのである。

しかし文明だけは生きて、草原の帯をつたいつつ、リレーでもするように東へ伝えられて行つた。

ふつう、書かれてきたところの世界史は、そのときどきにおいて最もすぐれた形而上学と古代科学、さらには造形芸術をあわせ持った文明を時代順に編述されたものである。スキタイ民族が騎馬でもって黒海北方の草原に駆けていたころ、旅行者としてかれらを見、歴史家としてかれらを書いたヘロドトスも、ギリシア文明のなかのひとであり、この「歴史の父」が属した文明は、他の多くの人類のなかできわだった光芒を放っていた。

が、地球上の他の多くの人類は、草莽のなかで、動物とさほどかわりのない暮らしをしていた。めぐまれた可耕地に住んで比較的大きな社会を構成しているひとびとはべつとして、河川漁撈で生きる者たちや、森林を彷徨してささやかな道具で小動物を獲っている者たちは、血縁グループによる小社会しか構成しておらず、その生産も心もとないものであった。かれらはつねに食べるのがやっとなであり、その食べものさえ得られない日が幾日もつづくといったぐあいの心もとない暮らしをしていたであらう。

人類のうち、このような部分に属するひとびとは、ごく最近にいたるまで、ふつうの歴史の記

録の価値基準からいえば、記録されるに値しない消長をつづけた。紀元前に地表のさまざまな部分に散乱しつつ生きていたかれらにとって、苦しみといえば、ギリシア人のような形而上的なものではなかった。いかにすれば生物的に生存をつづけられるかということであった。

そこへ出現するのが、遊牧であった。以上のような意味において、かれらが生きるための手段を発明したスキタイ人の偉大さは、ギリシア文明に劣らず、世界的なものであったと私は考えている。

繰りかえしいうようだが、西方のスキタイの盛衰が紀元前六世紀から紀元前三世紀である。

はるか東方のモンゴル（外蒙古、いまのモンゴル人民共和国）高原において、

「匈奴（きょうど Huna または Hunna）」

とよばれるスキタイ文明とそっくりの遊牧・騎馬文明をもつ大集団が出現し、中国という大農耕地帯をおびやかしつつづけるのは、紀元前四世紀末から約五百年にわたったことである。

このことの時間的・空間的関係のあざやかさに注目したい。

スキタイが遊牧を創始してわずか百数十年かと思われる時間内に、遊牧文明は地球上を走るようにして伝播し、モンゴル高原に、その文明の後裔（こうい）が出現し、スキタイ以上の武力（言い換えればそれに参加する人口）をもつにいたるのである。